

「戦争責任告白」

2020年07月10日

亡くなられた井上良雄先生を中心に教団の有志の牧師たちが『時の徴』という同人誌を出している。カール・バルトやディートリッヒ・ボンヘッファーに学んだ人々が多く、神学的に深い洞察をもって、時代の徴を見極め、興味深い論考を掲載した雑誌で、私は愛読し、多くを学んでいる。2020年6月号に、東京女子大学名誉教授の倉持和雄氏が「日本基督教団の戦争責任告白と日韓キリスト教交流」と題した論文で、韓国人との関りについて提言している。倉持氏は横浜の清水ヶ丘教会の牧師であった倉持芳雄牧師の御子息で、韓国問題と深く関わった倉持牧師の影響を受け、韓国研究に携わるようになったと言う。

戦争責任告白は、私が神学校を卒業した1967年に、時の教団議長・鈴木正久牧師の名で公にされた。その告白は、その名の通り、下記のように要約される。「世の光」、「地の塩」である教会は、キリスト者の良心的判断に従い、祖国の歩みに対して正しい判断をすべきでしたが、教団の名において、戦争を是認し、支持し、勝利のために祈り努めるように内外に向かって声明してきた。祖国が罪を犯した時、教会もその罪に陥った。「見張り」の使命をないがしろにしたことを、深い痛みをもって懺悔し、主に赦しを願うと共に、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある兄弟姉妹、またわが国の同胞に赦しを乞う。愛する祖国は憂慮すべき方向に向かっているが、教団は再び過ちを繰り返さず、使命を正しく果たすことができるように、主の助けと導きを祈り求めつつ、明日に向かっての決意を表明する。

この戦争責任告白は、教団内で賛否両論の激論が交わされ、私は生々しい教団の実態を体験した。教団総会で決議されたものではなく、常議員会で決議し、教団議長の名で公表されたが、教団の告白であることに間違いない。鈴木牧師を中心に若い牧師たちが苦心惨憺して出された、歴史を担い、キリストの教会であろうとする告白であった。

教団は1941年にプロテスタント諸教派が合同して誕生したが、その時の「生活綱領」の第一に「皇国ノ道ニ従ヒテ信仰に徹シ各其分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルベシ」と掲げている。「主の民」として生きるよりも「天皇の民」として生きることを第一としている。そこに形造られる教団は、天皇を賛美し、戦争協力に邁進したことは当然の道筋であった。教団の姿勢に異議を感じた人々もいたが、大方の教会は軍国主義化に流された。この過ちを告白しなければ、世界の人々に認知されるキリストの教会になれないという危機感があった。ドイツの教会の場合、多くのキリスト者はヒトラーへの忠誠を表し、服従し、暴走した。しかし、ヒトラーに抵抗する牧師・信徒たちは「バルメン宣言」で、「聖書においてわれわれに証しされているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において服従すべき神の唯一のみ言葉である」と告白し、ヒトラーへの不服従を表明してドイツ教会闘争を展開した。彼らは迫害を受け、ボンヘッファーは残酷に処刑された。ナチズムの崩壊後、「シュトゥットガルト宣言」を出し、教会の過ちを表明した。また、ヒトラーに追従したキリスト者たちも悔い改めを告白することによって、教会に復帰することができた。ドイツ教会闘争と責任告白を知って、教団も戦争責任告白を出して新しい教会になろうとする機運が醸成された。もう一つは、日韓の国交関係が回復し、韓国への渡航ができるようになった1965年、時の教団議長・大村勇牧師が韓国基督教長老会の総会に来賓として招待された時のことである。招待を受けて渡韓したにもかかわらず、大村牧師は直前で、議場に入ることを拒まれた。戦時中、韓国人キリスト者たちは神社参拝を偶像礼拝として拒否したが、教団は社会儀礼だとして、神社参拝を強要し、彼らの苦悩を無視した。

神社参拝を拒んだ韓国人キリスト者たちは迫害され、拷問を受け、多くの殉教者を出した。そのような日本の教団議長の挨拶を受けることに異議が出され、紛糾したのである。3 時間の激論の末、1 票差で挨拶することが許され、大村牧師は、日本の過ちを真摯に謝罪した。挨拶後、議場からスタンディングオベーションを受けたと言う。この大村牧師の事件が戦争責任告白を出す要因となった。私は上記の二つが、戦争責任告白を出す、大きな要因になったと思っているが、倉持氏は、大村牧師の件を重要視している。

この戦争責任告白は、韓国も含め、海外の教会から肯定的な評価を受けたと言えよう。そして、教団と韓国キリスト教会との交流の扉が開かれるようになった。しかし倉持氏は、そう単純なことではなかったと、論を進めている。戦争責任告白は、日本のキリスト教界において、報道は少なかった。韓国においても、報道は少なく、告白全文は紹介されたが、「手遅れの恨みはあるが、きわめて歓迎すべきこと」と簡単なコメントだけで、反応をほとんど見るができなかった。その後教団で、戦争責任告白に対する批判が起こった。それが、韓国のキリスト者に、戦争責任告白は真心からのものではないという疑念を引き起こした。日本の教会に大きな影響と示唆を与え、岩波の『世界』で「韓国からの通信」を書かれた T・K 生こと、池明観氏は「罪責告白そのものよりもその後に見られたと伝えられる告白反対の声に、韓国のキリスト者はかえって敏感であった」と書いている。

告白発表後の 1967 年 7 月、教団は韓国を代表する三つの教団と宣教協約を結ぼうとした。協議のため渡韓した鈴木議長と木村知己書記は、冷やかに迎えられた。韓国の延世大学に留学していた沢正彦牧師は、この時のことを「長老の一部は、心を閉ざしていたことも、事実であったようだ」と書いている。日韓会談妥結直後の時期、キリスト教会も含め、韓国社会は反日情緒が渦巻いていたが、戦時下、神社参拝を強制されたことの痛み、苦しみが生々しく記憶されていたことが背景にある。これは、消すことのできない、韓国人キリスト者の実体験であったのである。戦争責任告白が両教会の交流を開いたことは確かであるが、倉持氏は、「だがそれは事の一面でしかない」と言っている。

1919 年の三一運動の時、日本の官憲は堤岩教会に村人を押し込め、焼き討ちし、23 名を殺害した。堤岩教会での焼き討ちは、過酷な弾圧を加え、多くの犠牲者を出した悲惨な事件の一つであった。1960 年代、尾山令二牧師が堤岩教会の新会堂建設のため謝罪の募金活動をした。1970 年に会堂は建設されたが、日本人のお金で会堂が建つことへの反発は大きかった。献金は受け入れられたが、反日感情が渦巻いている中で、日韓キリスト教会の和解の一步となった。横浜港南台教会でツアーを組み、韓国を訪問した時、堤岩教会を訪ねた。その日は日曜日で、堤岩教会で礼拝を捧げた。私は、日韓の歴史の不幸を知らずにいることは、両民族の和解を生まないと説教をした記憶がある。堤岩教会に付設する記念資料館には「赦しはしよう、しかし忘れまい」と書かれている。

倉持氏は「韓国の人々がいまだに忘れえない植民地時代の苦痛の事実をわたしたち日本人がまるでなかったかのごとく振る舞ったとしたらどうして韓国の人々が憤らないでいられようか」と書いている。

現在、政治的には日韓関係は芳しくない。歴史認識の問題であると、双方が主張している。自分の立場から一方的に主張するのではなく、相手の立場になって考えてみる必要がある。民間レベルでは、盛んな交流があることが望みで、ここから、和解の出来事を生み出していけるのではないか。